

大会が終わったとき、同じボランティアだった男性が、何かやらないかと仲間に声をかけた。希望者が30人くらい集まり、松本城のボランティアを始め、これが「松本SGG」の活動に発展した。

すると、次のチャンスが巡ってきた。長野冬季オリンピックの7年前の1991年、語学ボランティアを対象とした無料の通訳強化トレーニングセミナーが、長野市と松本市で開催されることになった。3千人ものボランティアが募集され、オリンピック前年の12月まで、6か月単位のセミナーが用意された。

実は、このセミナーの松本教室の企画と講師依頼などのアレンジは、中田さんが担当している。松本での外国語ボランティア団体は「松本SGG」しかなく、長野県が白羽の矢を立てたのだ。



サムライと外国人と一緒に記念撮影

そして、当時の会長が中田さんにその仕事を一任した。それまでの英語学習のおかげで、信州大学の先生などに知り合いができていたから、まさに適任。「私、割とそういうのが得意だったことが分かったの(笑)」。

セミナーが終わると、今度は中田さんが皆に継続して活動をしなしかと声をかけた。「せっかく国宝の松本城があるのだから、そこでやらせてもらいましょうよ」と。それが、NPO法人アルプス善意通訳協会(ALSA: Alps Language Service Association)の始まりだ。

ALSAがあつて救われた

ALSAは最初から140人もガイドが登録した人気のある活動だ。しかし、ガイドマニュアルもお城の知識もない素人集団。これではいけないと、国際交流員の外国人にも助けてもらい、有志でマニュアルを作成した。素晴らしいマニュアルが完成したが、あまりにも難しい。そこで、初心者用簡易版を作成し、それをマスターした人が本篇に進むことにした。

現在の会員は約170人、女性と男性の比は2対1ほどで、平均年齢は約53歳だ。ただし、現役世代は仕事があるので活動ができ

ず、辞めていく人も多い。実際の活動主体はやはりリタイア世代だ。

ほとんどの会員が週に1日、ガイドを担当する。中田さんの担当は金曜日だ。ゴールデンウィークはやらない。混んでいてなかなかお城に入らず、ガイドどころではないからだ。ガイド料は無料。チップをくれる外国人もいるが、原則として受け取らない。

メンバーは英語、フランス語、スペイン語、中国語などの語学だけでなく、お城の基礎を学ぶ会や発音クリニックなど、ガイドの力を高める勉強会にも積極的に参加する。

「年間3500円の会費を払って、交通費も勉強会参加費もみな持ち出しなのに、みんな、なんて出てくるんでしょうね」と、誇らしげだ。



外国人がひっきりなしに訪れる

昨年、松本市がお城の入り口に冷暖房完備の待機所を造ってくれた。それまではテントで、雨が降ればびしょ濡れ、風が吹けば物が飛ぶ状態。11月中旬から3月末までの冬季は活動をやめていた。待機所のおかげで通年活動ができるようになり、対応した人数も5千人から8500人と飛躍的に伸びた。何時から何時まで、どの国の人を案内したかという記録はきちんと取っている。

中田さんはALSAの活動に設立から25年間途切れることなくかわってきた。それが縁で、松商短大からの要請を受けて英語教師も務めている。それが65歳で定年になったので、いよいよALSAの理事長を引き受けたのだ。

中田さんが理事長になってから5年が経った。6月には25周年記



待望のボランティアガイド待機所ができた

*SGG(Systematized Goodwill Guides): 善意通訳組織(詳細はp.32参照)